

奈良新聞 創刊記念企画

Mission ~危機のとき 求められる創造と守るべき使命~

皮革製品

JUNKEI-GLOVE 吉田 貴夫・社長

JUNKEI-GLOVEは、三宅町で野球クラブ・ミットの製造・開発を営んでいる。創業は1946年、その歩みは日本およびアメリカの野球発展の歴史と大きく重なる。同社は型を研究し、革を探し求め、最高のプレーにつながる最高のクラブ作りを続けていくことを理念としている。商社や大手スポーツ用品メーカーの下請けから独自ブランド「JUNKEI-GLOVE」を誕生させ、新たな時代のモノづくりを挑戦するJUNKEI-GLOVEのモノづくりを語るJUNKEI-GLOVE 吉田貴夫社長にお話をうかがった。

皮革製品盛んな三宅町で創業
大手スポーツ用品の下請けを

「創業時代のことをつか
がたいと思います。」

吉田 弊社は祖父の吉田順計が1946年、吉田順計商店として設立しました。当時は野球クラブだけでは経営的にやっていたので、カバン、ジャケットなど皮革製品を手掛けていました。



「野球クラブに特化した
といった経緯は。」

野球グラブの製造・開発

吉田 アメリカでは古くから野球が盛んでしたが、970年代になるとクラブ生産は韓国やフィリピンにシフトしていき、それが日本からの輸入にシフトしてきて、1960年代には地域全体が活性化しました。弊社では1960年代に7万個ぐらいのクラブが、アメリカに輸出されていた

最高のモノづくり

独自ブランド、神髄に迫る

「社長の自身の御社との
かかわりは、
吉田 父の吉田誠亮は1990年に社長に就任しました。私は99年に入社し、クラブ製造に取り組むようになりました。」

す。アメリカへの輸出はも
ちろん、市場が拡大してき
た日本の野球界について
も、流通ルートを考える
と、これら大手企業の意向に
従わざるを得ません。地場産
業のメーカーは、硬式野球
クラブを生産するメーカー
と軟式野球クラブやミット
を生産するメーカーとに分
化していききました。

この間、大手スポーツ用品
メーカーが型の修正を要
求してくるなど、難しい課
題がありました。クラブ製
造の難しさは、立体的な製
りにあります。ここが平面
のミットと違うところで
す。製造にあたっては、い
ねいに縫う、きれいに裁断
するなどの技術が要求され
るのですが、とりわけ難し
いのは、クラブを使う野球
選手の使いやすさを考える
ことです。背面にゆとりを



一つ一つ手作りでクラブを作る吉田社長

「祖父母の技術進化
「自然に」を工夫
「独自ブランドであるJUNKEI-GLOVEの誕生についてうかがいたい
と思います。」

「祖父母の技術進化
「自然に」を工夫
「独自ブランドであるJUNKEI-GLOVEの誕生についてうかがいたい
と思います。」

吉田 いま言ったように、クラブ製造の技術は全体がそろっていないと製品としてモノになりません。そこで順計の代から受け継ぎ進化してきた技術をベースにして、独自ブランドを開発しようと思いつきました。技術的には、型作りにおいて完全な立体作りで、吸いつくように乗るクラブ、力が指先まで伝わりやすいクラブを作りました。芯の指がまっすぐ垂直になるようにするところが秘訣です。その結果、捕球しやすく、またクラブが軽く感じられるのです。型は1ユニットで狂っていても、ねじれが生じます。アタリの位置がたいへん重要で、指の頂点を同時に通過するように、また革の伸びが自然な状態に指が伸びるようにしてねじれが生じない自然なクラブにします。

「使いたいクラブ
今後作り続け
これからの展望について」
吉田 JUNKEI-GLOVEというブランド構想は2008年ごろに始まり、15年から本格的に活動するようになってきました。スポーツ用品業界では、有名な選手が使っているクラブやパットなどが一時の流行を形成します。しかし私は、

そのような流行に乗る商法はしたくありません。なぜなら、それはある種の名前で売れているわけで、本質が買われているからではないのです。モノづくりの基は、モノがいいと思ってくれる人が、高い価格でも手に入れたらと思うことです。その背景には、細く長く守り続けてきたブランドの技術力がありません。これからは、使う人が使いたいクラブを作りたいと思っています。

投手用から内野用・外野用とさまざまなクラブが展示されている

